
ヴァージンロード

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウァージンロード

【Nコード】

N3661M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

みんな恋してる。と北海道からの転校生の続編？ ときなものです。貴方が必要なの。要素も少々はっております。新一と蘭の結婚式です。

新婦、控え室 蘭side

私は、今日、

新一のお嫁さんとなる。

おかしいよね？

新一と会えなくて寂しかった、あの時がうそみたい。

コンコン

「はい。」

「やつほ」

「園子！和葉ちゃんと青子ちゃんも！」

「もう一人、いるわよ。」

「え？」

「久しぶり。蘭ちゃん。」

「美帆ちゃん!!」

「手紙ありがとう。ごめんね、転校するとき、住所聞くの忘れてたもんで。」

「あははは。いいの。来てくれたんだから。」

「誰？」

「蘭ちゃんのお友達？」

「あ。2人は初めてだね。新一が元に戻る前、転校してきた友達になった開美帆ちゃん。」

「はじめまして。」

「よろしゅうな。」

「よろしくね!」

「美帆ちゃんが転校してって、松田君が転校してきたんだっけ。」

「松田？松田って、松田浩二・・・だったりする？」

「うん。そうだよ?。」

私と園子は?マークをだしている。

「そつかあ。浩二ちゃんの転校前はやっぱ、帝丹高校だったかあ。
東京から来たって聞いたけど・・・やっぱりねえ」

「「浩二ちゃん!?!」」

男の子をちゃん付けで呼ぶ。

これには和葉ちゃんも青子ちゃんも口をあけていた。

「あれ?やっぱ変?私、男の子をときどき、ちゃん付けで
呼んじゃうんだよね。」

「そうなんだあ。」

「そうそう、さっきね、哀ちゃんとあつたけど、
新一君に蘭ちゃんを会わせるなって青子、言われたあ」

「あたしもや。工藤君に会わせたらあかん。ってな。」

「私もよ？なんかあったの？」

「ううん。さっきね、哀ちゃんが来て、私の姿を新一に見せないようにって」

「言ってたんだ。」

「なるほどね。」

「工藤新一も相変わらずなんだ。」

「まあね。」

新婦の控え室では、

新一の話がもちきりだったとか・・・

「ごめんなさい。工藤君。」

「だから、いいつて言っただろ？」

「蘭さんにいろいろと励まされたわ。やっぱり、いい人ね。蘭さん。」

「あつたりめえだ。俺が選んだ奴なんだからよ！」

「語っちゃって…そうそう、蘭さんの姿。かなりと綺麗だったわよ？」

「マジで？」

俺自身、顔がにやけているのわかる。

「でも、見ちゃ駄目よ？」

「は!？」

「本番までのお楽しみ。
すこし我慢強くなってみたら?
探偵さん♪じゃあね。」

ボタン

「うそだろ・・・？」

というのがほんの数分前。

「はあ。」

見てえ。

すっげえ見てえ。

蘭のウェディングドレス姿。

綺麗なんだろうな・・・

「じゃっまするでー！」

「やつほー新一！」

「服部に快斗……」

「なんや、しけた顔して。」

「平次平次。」

「なんや、快斗。」

「今の新一がしけた顔するのはただひとつ。
蘭ちゃんのドレスアップ姿が見れないからじゃん！」

ドキッ

「ほら、凶星だ〜」

俺は快斗に文句を言おうとした。

そのとき。

カチャ

「工藤君。」

「松田」

「松田？誰や？」

「あー。青子が言ってた。

園子ちゃんから聞いたらしいんだけど、蘭ちゃんを好きになって、
新一に負けて、北海道に転校してた奴らしいよ。」

「なるほどな。」

「おめでとう。」

「どうも。」

「この度はごめんね。」

工藤君は思い知らせたかったんだろ？僕が毛利さんに対する
思いは表面上だって。」

「よくわかったな。」

蘭の表面上だけ好きになってとつとと転校してほしかったが、

諦める様子がなかったから思い知らせただけ。

「はは。やっぱり。」

じゃ、お幸せに。」

ボタン

言いたいことだけいつて、

奴はいなくなった。

「工藤、姉ちゃんを幸せにせんと、毛利のおっちゃんに殺されるで？」

「名探偵毛利小五郎。名探偵殺し！相手はあの、工藤新一！！
って見出しでさー。」

「おいおい、誰が殺したって証明すんだよ。」

「2人も名探偵がないからね〜どうしよう。」

「ちょーまで！俺がおるやんけ！！」

快斗と2人で服部を遊ぶ。

「それにしても、工藤が白で快斗が黒やと
なんか変な感じすんな。」

「新郎が白を着るのはあたりまえだろ。」

「新郎より目立つわけねえだろうが。」

「まあ、2人とも同じ顔やし、気にせんで過ごしてたら違和感を感じないわ。」

「そうだ、新一。」

俺が新一の変わりに新郎。やろつか？」

快斗が俺を困らせようと、

怒らせようとしてるのがわかった。

「じゃあ、俺が青子ちゃんの彼氏。やるのか？」

「じよ、冗談だつて！なに言ってるのさ、新一。」

顔が引きつってるぞ。

新郎の控え室にもぎわっていた。

新郎、控え室 新一 side (後書き)

哀「だから、なんで私が工藤君に感謝しなきゃいけないのよ。」

桜桃「ひい！ごめんなさい・・・」

哀「で、工藤君がひどい目にあう作品は完成したのかしら。」

桜桃「まだです・・・」

哀「まだ？」

桜桃「い、今から書く準備します！！！！ 逃げる」

哀「逃げなくなっただけいいじゃないの。」

よかったね。

「はあ。」

「どうしたのよ、ため息なんかついちゃって。」

美しい花嫁。

私の親友、毛利蘭は、はれて新一さんと結婚。

つてときにため息をついている。

「だって、これ全部、夢なんじゃないかな。って思っちゃうの。」
「・・・」

無理もない、か。

「園子、今、すっごく複雑。」

「え？なんで？新一君のお嫁さんになるんだよ？」

「うん、そのことに関しては嬉しい。」

でも、哀ちゃんは新一をすきだと思うの。だから、申し訳ないって気持ちもあって、さっき園子たちが来る前に、哀ちゃんに会ったんだけど、

私、とってもえらそうなこと言っちゃったし。いやな女だよね。私って。」

「蘭……」

「冗談は対外にしてほしいわね。」

「「哀ちゃん!？」」

「私がなんで工藤君を好きにならなきゃいけないのよ。」

「ちがうの？」

「はあ。蘭さんはなにを考えてるのかしら。

私、工藤君をそういう目で見たこと一度もないわよ？

工藤君を見てると面白いとは思っけどね。」

「あ、それ同感！新一君を見ると蘭を愛してますうオーラが漂ってるのよね。」

私はウィンクして、蘭と哀ちゃんを見た。

「そういうこと。」

あとで思いっきり冷やかそうと思って観察してるのよ。」

「そうだったんだあ。」

蘭は安心した様子。

「あ、園子さん。今日は三年B組のみなさんは来てるのかしら？」

「ええ、もうばっちし！」

「そう。じゃ、蘭さん、私から最高のプレゼントを渡すから
楽しみにしててね。」

「え？あ、うん。楽しみにしてる。」

コンコン

「そろそろ時間です。」

「もう、そんな時間？
蘭、キス。がんばるのよん？」

「園子！」

「ばっちしこの園子様が見てあげるってーの！
あっはっはっはっは。」

「もう・・・」

でも、

本当、よかったね。蘭。

よかったね。(後書き)

哀 「蘭さんったら、勘違いにも度がすぎるわ。」

桜桃 「私も哀ちゃんが新一を好きなんだと思ってた。」

哀 「工藤君を実験台にすると蘭さんが可哀想よね？
そろそろ変えよかしら。」

桜桃 「？」

哀 「貴女を実験台にしてもよさそうね？」

桜桃 「え．．． 気絶」

哀 「ばかね、嘘よ。」

誓いのキス

「あなたは蘭さんを妻とし神の御定めに従い
聖き婚姻を結んで共にその生涯を送りますか
あなたはこの女性を愛し、慰め、敬い、支え
兩人の命のある限り一切、他に心に移さず
この女性の夫として身を保ちますか」

「いたしません。俺は、生涯と言わず、
死んでも愛しぬきます。」

「新・・・」

「蘭さんあなたは新一さんを夫とし
神の御定めに従い聖き婚姻を結んで
共にその生涯を送りますか
あなたはこの男性を愛し、慰め、敬い、支え
兩人の命のある限り一切、他に心に移さず
この男性の妻として身を保ちますか」

「はい、いたします。」

神父は優しく微笑み、頷いた。

「では、誓いの口付けを。」

3秒ほど交わした後、微笑んだ。

ウェディングベル

「蘭ちゃん、きれいだな」

「青子、惚れ直しちゃった!」

「あははは。」

「工藤、しりにひかれんなや!」

「お前もな!!」

「どういう意味や!」

「ワン、トウー、スリー・・・」

バタバタッ

鳩がでてきた。

ポンッ

鳩がバラのシャワーへとかわった。

「快斗君・・・!」

「さすが、マジシャンの卵!」

「それほどでも！」

「新ちゃん！蘭ちゃん！こっち向いて！」

スッ。

新一は蘭を抱く。

「ちょ、新一！？」

「ばーろ。結婚式にお姫様抱っこは付きもんだろーが。」

「見せ付けてくれるわね！」

「新一君！蘭を泣かせたら承知しないわよ！！」

「わぁってるって！」

「6月4日。」

ターゲットSはRことSの恋人の3カ月ぶりのデート。

なんたつて、このところ事件続きでキャンセルの山・・・

（この続きは「名探偵やられたり。」をお読みください♪）

・・・

「そ、そんぐれーお前に惚れてるってことだよ。」

「ありがとう。」

2人にはやっぱりかなわない。

つと一同、誰もが思った。

誓いのキス（後書き）

桜桃「最高にして最強の結婚式だよ。」

美帆「1回しかでれなかった・・・」

桜桃「文句言わない。出ただけいいじゃない。」

浩二「でも、あれはねえよな？」

美帆「そうだよ！浩二ちゃんの言うとおり。」

桜桃「もう、しょうがない、あとちよつとだけだしてあげる。本当に2言3言だけだよ？」

美浩「「いえーい！」」

桜桃「まったく・・・」

おめでとう!!

工藤君！

よっ！工藤。

ジーちゃん！ダッド！クリスマスにリーナちゃん、エレナちゃん…

来てくれたの？ありがとう！

ダニエルとマリアも来てるのよ？

そうなの。うれしい！

あ、工藤君、ひとつ、言わせて。

あのね、最初、工藤君を見たとき、ただ、顔だけ。

つまり表面上だけで判断してたの。でも、だんだん知る度に、

工藤君に惹かれてた。

わかったの。好きでした。工藤君。

蘭さんを幸せにしないと、私、なにしでかすかわからないわよ？

・・・そりや大変だな？

笑いにあふれた。

「蘭ちゃん！写真撮るってー！」

「わかった！」

「工藤君。鈴木さんの怒りを爆発させたら大変なことになるからね？」

「松田に言われなくてもわかってるよ。」

工藤君、写真って工藤君たちを撮るの？

みんなで撮るか。

うん！そうだね。ジーちゃんたちもおいでよ！

いいの？

もちろん！ダニエルさんやマリアさんも。さ？

「美帆と松田くんもおいで！」

「「うん！」」

「じゃあ、いきまねー！いちにさんはい。」

パシャ。

「オッケーです。」

撮影が

終わった。

祝福！！

「おめでとう。蘭、新一君。」

「ありがとう。園子。」

「工藤君も蘭さんのありがたみをもうちよつと身にしみるがいいわ。」

「いやみかよ。」

「工藤、絶対幸せにするんやで？」

「お前に言われなくてもするさ。」

「蘭ちゃん、今日はほんまに綺麗やったよ？」

「本当？ありがとう。」

「新一！蘭ちゃんみたいな綺麗な子が奥さんでよかったな！」

「まあな！」

「青子、蘭ちゃんの結婚式これてよかった!!」

「そう言ってくれてなによりだよ!」

「新ちゃん、これからが大事なときよ?」

「わあってる!」

「蘭君、新一じゃあものたりないだろうが、よろしくおねがいするよ。」

「い、いえそんなことはありません。」

「蘭、幸せになるのよ? 絶対。」

「うん。」

「おい、新一! 蘭を泣かせたらただじゃおかねえからな!!」

「わかってます。」

「蘭ちゃん、また会おうね!」

「美帆ちゃん…うん!」

「工藤君、お幸せに。」

「俺以外に誰が幸せにすんだよ？なあってな。わかってるよ。」

工藤君、蘭ちゃんを泣かせたら殴りに行くからね！？

こわっ！

蘭さん、ありがとう。

マリアさんも大変だったでしょ？

ありがとう。そしておめでとう。

ありがとう。ダニエルさん。

工藤！浮気だけはするなよ？

誰がするか！！

蘭さん、お綺麗です。

ありがとう。エレナさん。

さっすが工藤君の奥さん！

／／／／

「工藤君！子供にも期待をしてるぞ！」

「警部、気が早いですよ。」

「蘭ちゃん、工藤君を捕まえたからには、放しちゃだめよ！？」

「佐藤刑事も高木刑事と仲良く。」

「工藤君、蘭さんとデート中に電話しちゃうかもしれないけど・・・」

「はい。断るときは断りますから。気にしないでください。」

「蘭お姉さん、綺麗～。歩美もなれるかな？」

「歩美ちゃんならできるわよ。」

「新一！うな重、今度おごれよ」

「無理だな。」

「蘭さん、新一さんと結ばれてよかったですね。」

「ありがとう。光彦君。」

みんなに祝福された。

警視庁のみんながくる、結婚式。

有名人が集まった、結婚式。

これから期待がかかっている、結婚式。

これほど盛大な結婚式は、

ないだろう。

祝福！！（後書き）

博士がいなかったような・・・
まあ、気にしないでくださいね！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3661m/>

ヴァージンロード

2010年10月9日13時43分発行